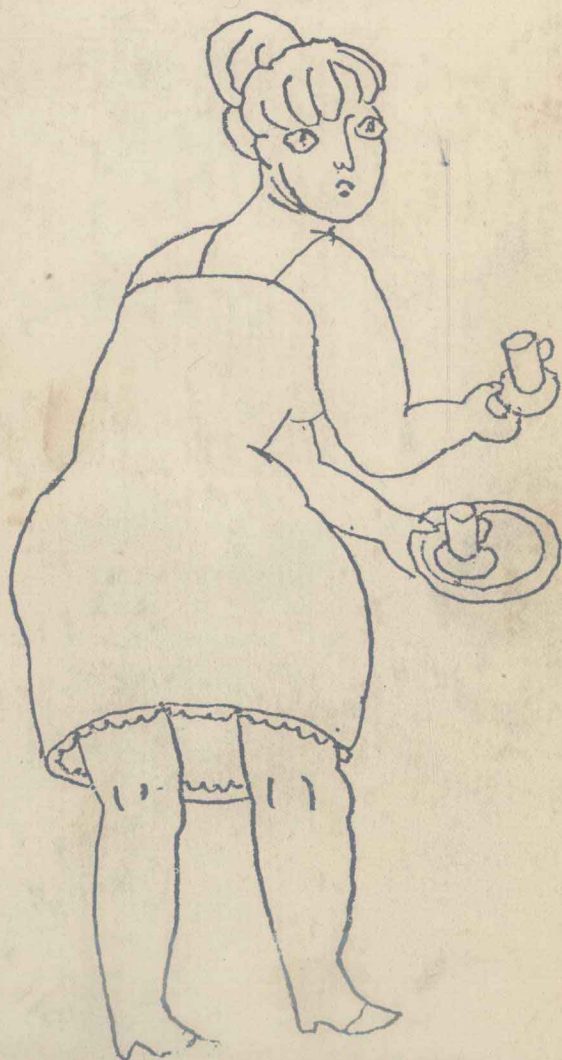


ああいえばこういう

感情的文明論
安岡章太郎



いへはこういう

感情的文明論

安岡章太郎



ああいえばこういう

——感情的文明論



昭和四一年八月五日 第一刷

定価 三八〇円

著者 安岡章太郎
発行者 上林吾郎
発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話 東京二六五二二二一
振替 東京 七八七四三

印刷所 大日本印刷
製本所 矢嶋製本

万一落丁乱丁がありましたら
お取りかえします

あ
あ
い
え
ば
こ
う
い
う

目次

感情的文明論

坐りダコの神秘

7

祝儀考

22

バカンス遊びの突撃精神

36

「愛国心」について

51

根性について

66

ラーメン 日本を征服す

79

“ヒマという牢獄”の電化生活

96

女性恐怖

111

迷信の科学

125

幻影のなかのマスコミ

153

ああいえばこういう

齒は何のためにある？

馬と運勢

個人的幸福

キカイについて

ステレオてんかん

ジュシヨウの心

犬も食わないはなし

残酷な季節

床の間の効用

美醜について

あとがき

167

172

178

183

189

194

200

206

211

216

222

装幀 伊丹二三

感情的文明論

坐りダコの神秘

喫茶店というと、私は昭和十年代の神田の裏通りを憶い出す。ちょうど支那事変がはじまる前後から、大東亜戦争のはじまる直前まで、おおげさな言い方をすれば、日本壊滅の前夜が、喫茶店全盛の時代ではなかったろうか。そのまえの昭和五、六年、つまり不景気のどん底のころはカフェーの全盛期であり、大東亜戦争に入ってから、喫茶店にかぎらず、あらゆる飲食店が普通の営業が出来なくなった。戦後の喫茶店については、またあとで述べるが、要するに「喫茶店文化」というヘンテコリンなものについて語るとすれば、昭和十年から十五年ぐらいまでの、あの不景気と戦争とに挟まれた谷間の時代を振り返らないわけにはいかない。

あのころ古本屋のならんだ神田の表通りから、ちよつと横丁へ入ると、軒並みに、色ガラスに電燈をともした喫茶店が看板をつらねており、ジャズのレコードが路地までガンガン鳴りひびいた。ベニー・グッドマンの楽団の最盛期にあったところで、このごろでもときどきやっている「シング・シング」という曲は、当時最大のヒット曲だ。グッドマンの演奏はスウィングだったが、

ルンバも大はやりで、「ルンバ・タンバ」「カリオカ」「南京豆売り」「タブウ」「マリネラ」など、みんなあのころにはやりだした。タンゴでは「ラ・クンパルシータ」「夢去りぬ」「夜のタンゴ」、そして日本人の作曲した「雨のブルース」「別れのブルース」などというのも支那事変の初期につくられた。その大半はいまの若い読者にも、曲名は知られているだろうと思う。つまり、あれはそういう軽音楽の全盛時代でもあったわけだ。

それは、別の言い方をすれば、アメリカのジャズがレコードやラジオや映画（それ以前はみんな無声の活動写真だった）に乗って、世界中にバラまかれた時代であり、アメリカニズムが全世界に根をはって、あらゆるところで大衆の間にシミこみつあつたときだといえるだろう。

喫茶店文化というのも、つまりはああいうかたちでアメリカニズムが、われわれの生活の中に入って来たということだ。

ちやうど、そのころ私は中学（旧制）を卒業したものの、上級学校の入学試験に落第ばかりして、勉強もせず、働きもせず、毎日、身のおきどころもないような生活をしていたから、喫茶店へはよく出かけた。

予備校の授業を途中からぬけ出して、盛り場の裏通りをジャズのレコードの鳴っている方へ行くと、店先にウエイトレスが立って、ドアの影から通りかかるわれわれの顔をじっと見つめている。……小便臭い路地でも、タンゴの音がひびき、薄暗い戸口の合間から、眼の大きな女の子がこちらを向いて立っているのが覗けると、それだけでも何か体の中が熱くなるような気がした。けれども、それでフラフラと店の中へ入ってはダメだ。「いらっしやいませ」と、女の子が頭

の Teppan から跳び出すような声を上げてドアをあけ、店中の女がそれに声を合せて唱和するが、それですべてはおわってしまふ。つまり戸口に立っているのは、店で一番魅力的な顔立の女の子であり、彼女はつねに通りを見張っている役目だから、なかに入らなかつて客をかまいつけてくれるわけでもなく、かといつて他の女の子たちも客席へはコーヒーを運んだりするだけで、べつに何のサーヴィスをするのでもないから、われわれはそこで女の子の顔を遠くから眺め、コーヒーを飲んだり、あとはただの水を一、二杯おかわりして、出てくるより仕方がない。

はいるまでは、いかにも何かありそうで、はいつてみると何もない、喫茶店とは大部分、そういうものであつた。

もともと、いっばい十五銭（いまの値段では七、八十円）のコーヒーを飲みに入つて、それでウマイことにありつこうとしたつて、無理な相談だ。……もちろん、そういう喫茶店の女の子をクドいて、恋愛へ成功したという男は私の友人にもいるし、恋愛もしない喫茶店の女給などは、むしろ例外中の例外であるはずだが、私にはそういうチャンスはまったく訪れなかつたし、一体あんなところで、どうすればそんなキッカケがつかめるのかも見当がつかない。きつと、よほどの根気と忍耐力を要するだらう。私の友人の例でいえば、彼は恋愛に成功するまでマル二年、同じ喫茶店に欠かさずかよいつめ、毎日、二時間ほどその店の椅子に無言で坐っていたということだ。

私には、そういう忍耐力がなかつただけではなく、なかへ入つてしまふと喫茶店の雰囲気そのものが、がまんできなくなるところがあつた。とにかく客の大半は、まえに言つたように、戸口

に立つた女の眼つきに誘われて入った連中であるから、まわり中が自分と同じく欲求不満の状態にあるわけで、薄暗い店の中には何となく、そういう男臭いにおいがいっぱい立ちこめ、おたがいの鼻穴から吐き出す溜め息が、分厚い層になって何重にもつもり、眼に見えぬままにネットと軀じゅうにカラミついてきそうで、やりきれなかった。

それに、戸口に立っている喫茶嬢をふくめて、喫茶店自体の外側のつくりは、アメリカ風のモダンなものから、ロココ調、バロック調、近東風など、さまざまのものをゴタ混ぜにマネして、とにかくハイカラな飾りつけをしておるが、便所へでも入ろうとして、金ピカに塗ったドアをあけると、突然そこに煤けた障子や破れ畳の住居が覗けたりする。

もつと不思議なのは、店の奥の電気蓄音機のかたわらで、ピカピカした絹のアフタスーン・ドレスなど着て、西洋のお姫さまみたいな恰好で立っている喫茶嬢が、ときどき汚れたシユロ帚とチリ取りを持って、客席の合間の床に落ちたタバコの吸いガラや紙クズなどの掃除をしはじめることだった。そういうときに、お姫さまが舞踏会の服装のまま、たちまち雑役婦に落ちぶれるわけだが、客の眼の前で、そういうことがどうして出来たのか、彼女らの心事はいまもって不可解だ。

もちろん、喫茶店といってもいろいろの段階があり、銀座あたりの一流の店ではこんなことはなかったろうが、神田のスズラン通り辺りの店になると、ハイカラな外側とウスぎたない裏側と、マル見えに覗かせても一向、意にかいさぬ無頓着さがあった。

あまりハイカラに飾りつけて気どっているといっても、喫茶店の気どりというのは、はじめか

ら見え透くことを何とも思っていない気どりなので、金ピカのドアの裏側が破れ障子だって、それはアタリマエであり、ちっとも恥ずかしがったりすることでないと思っただけである。……こういうズウズウしいとも、おおらかとも、言いようのない感覚は、たぶん喫茶店文化の特質であらう。

このことは、もつと上等な喫茶店——たとえばクラシック音楽のレコードをあつめて、そればかりをきかせる店とか、世界各国のコーヒー豆を蒐集して、さまざまの凝ったコーヒーを飲ませる店だとか——そういった店でも喫茶店と名のつくところでは、結局、同じであると言える。表面をいくら飾っても、裏側まではとても隠しきれるものでないことは、誰にとっても常識なのだし、客はそれを承知で入っている。

ところで喫茶店というのは、もともととは何なのだろうか。永井荷風の小説やら随筆やらを読むと、明治のおわりごろ銀座通りの新橋に寄ったあたりに、フランス帰りの何とかいう絵かきがカフェ・ブランタンというのをひらいたのが最初だと書いてある。

当時は荷風をはじめ、そのころのハイカラな文化人たちが、新橋の芸者なんかをつれて入った店のようだが、そういう喫茶店は私たちの学生じぶんには、もうどこにもなかった。明治のころはともかく、昭和も初期のころには、そういう文化人のコロンバンだとか、資生堂だとかでは、横光利一、新居格、中村武羅夫などという人が、しょつ中、姿を現わしたという話だ。いったい横光利一がどんな顔つきで、そんな店に坐ってシュークリームのパイだのを食っていたのか、

想像すると滑稽なばかりで、本当のこととも思えない気がするが、どっちにしても喫茶店というものは、そのころまでは、まだ一部のハイカラな人たちの行くところだったのだろう。

それから七、八年たつて、私たちが出入りした神田の喫茶店などは、そのまゝはカフェーと呼ばれていたにちがいない。カフェーというのは客席に女給が坐つて酒などのませる店で、やがてそういう場所へは学生の出入が禁止されたから、「喫茶店」という名前に変つたのだろう。

そのうち「カフェー」という名は古臭くなつて、そういう店は「新興喫茶」とか、「特殊喫茶」とかいふ看板を出すようになった。それに対して、女給がそばへ来ない店は「純喫茶」ということになつた。……こういう、純、新興、特殊、などという区別は、たぶん風俗取締まりのお巡りさんと業者とが、取り締つたり、締まられたりしているうちに何となく出来上つたにちがはなく、何が新興で、何が特殊なのか、言葉の意味を考えただけではサッパリ見当がつかないし、いかにも形式的で内容がともなっていない点、官僚的な臭いがある。

しかし、言葉から考えれば、喫茶店は茶屋から出たにちがはなく、縁台に赤いモウセンを掛けて、甘酒だのユデ卵だのを出す、街道筋の埃っぽい店が喫茶店の原型ということになるのだろう。そういう場所には、目アカシや、十手をもつた捕吏が、いつもウロついていたらしいから、後年、喫茶店が警察の取り締り対象になつたのも、そのころからのシキタリなのであらう。

同じ大勢の雑多な人間があつまるところでも、喫茶店などよりずっと規模の大きいデパートなどには、お巡りさんは、あまり近よらず、新橋、赤坂などの大きな料亭が、取り締りの対象になつたという話も、それほど聞かないのは、喫茶店のことは最近でも何かといえはやり玉に上げら

れるのは、よくよく喫茶店というところは、目アカシ、巡査と縁が深いにちがない。

前にも述べたとおり、大東亜戦争のはじまる一年ばかりまえから、喫茶店はそれらしい営業ができなくなった。コーヒーの輸入が止って、大豆や麦のこがしたのにサッカリンを入れたものしか飲めなくなったし、ジャズのレコードをかけることも禁止された。そして喫茶ガールたちの服装は大時代なアフタヌーン・ドレスから、いっぺんにモンペ、あるいはスキー・ズボンに変わってしまった。

それでも私たちのよく行った渋谷のサラセン横丁というあたりの喫茶店は、いつも学生で、いっぱいだったようだ。

軍歌のレコードをききながら、大豆のコーヒーやコブ茶などを飲むことが、そんなに愉しいはずはないのに、喫茶店の人気が以前よりもむしろさかんになったのは、他に行くところがなかったからだろう。それに以前は喫茶店などへ入るはずのなかった人も、食い物のありそうところなら、どこへでも出掛けるようになったからでもある。それまでの喫茶店の客は、ほとんどが学生ばかりだった。

女や年寄りはもちろん、サラリーマンも商人も、ビヤ・ホールへは出掛けても、喫茶店へは、ほとんど寄りつかないようだ。それが、戦争のはげしくなるころになったら、軍人、駅員、工員、会社員などの姿が目立って多くなった。……考えてみれば、これが一番大きな変化だったにちがない。

しかし、じつのところ喫茶店の中の空気そのものは、これまでと、そんなに大した違いはな

った。薄暗く、湿っぽい部屋の中で、モンペ姿の喫茶ガールをめぐって、客はそれぞれネバネバするような視線をおたがい交错させており、青白い吐息があちこちから聞えてくるようで、胸がムカムカしてきそうだった。ただ以前とちがうことは私は、そんなときにすぐ席を立てて外へ出る気にはなれなくなつた。なぜだか知らないが、自分のまわりにベトベトしたイヤな空気が十重、二十重にとりまいていてることを感じれば感じるほど、ぬるい湯から上れないように、いつまでも同じ場所に坐つたまま動けなくなつてきた。

冷い、これかかった椅子の上で、塩辛いだけのコブ茶をすすりながら、すり切れたレコードの「曉に祈る」だの、「露営の歌」だのといった軍国調の歌謡をきいていると、ひどく情けない気持になるのだが、まえに神田の喫茶店で、アメリカのジャズのレコードをきいていたときとちがつて、「アア情ない、情ない」と思っているうちに、かえってだんだん、その情なさでウツトリしているような、そんな気持だった。

戦後、街の中で一番早く息を吹きかえたのはシナソバ屋と喫茶店だろう。コーヒーも砂糖も進駐軍物資の横流しがあつたし、ジャズもラジオがなりさえすれば進駐軍向けの放送をいくらでも流すことができた。おまけにもとと薄暗い喫茶店の雰囲気は、防空壕に椅子やテーブルを置いたものと、じつによく似ていたから、簡単につくれるわけだった。つまり、ヌケヌケとずうずうしい喫茶店文化の特質は、どんな時代になつても、その時代の空気とピッタリ合うように出来ている。